届恋

岡部　竜弥

【登場人物】

・少年

ここは学校の裏山。
夕方の学校の裏山。
秋の夕方の学校の裏山。
ここは裏山にある少年の秘密の場所。
奥から少年が走ってくる。
薄手のジャージはどことなく汚れており、その汚れ具合からつい先ほどついた汚れだとわかる。

少年　は――は――、

少年、数度の深呼吸をし、気持ちを落ち着ける。
少年、小振りな溜息をついて自分の服についた土を払い、少しだけ悲しそうな顔をする。

少年　「やーい、やーい。貧乏人。知ってるんだぞー。お前んち母ちゃんしかいねえんだろ。変なの。変なの」「うわっ。見て見ろよ。こいつ首に鍵なんかぶら下げてるぞ」「ほんとだほんとだ。鍵なんてお母さんに開けてもらえばいいのに。へんなのー」「あーそうか。こいつお母さんが働いてるから、家にいないんだ」「へんなのー」「へんなのー」「へんなのー」「そうだ、こいつ虐めようぜ」「いいねー」「いじめよういじめよう」「おらおら。」

少年、少年を虐めてきた四人の真似をしている。

少年　「やーい、やーい。お前の母ちゃんでーべーそー」――あああああ！ ああもう！ なんなんだよあいつら！！ いっつもいっつも虐めてきやがって！ なんだよ！ なんで毎回毎回母子家庭であることを確認してくるんだよ！ そうじゃなくなってたら祝ってくれんのかよ！ てかなんだよお前の母ちゃんでーべーそーって！ あいつ僕の母さんの裸見たことあんのかよ！ ってことは抱いたのかよ！！

少年、息を切らして座り込む。

少年　ああ、もう。いやになっちゃうよ…。家に帰ったって誰もいないし、友達なんて――あいつらのせいでできやしないし。ああもう！ ばかやろー！！

少年、立ち上がって向こうの山（客席）に向かって叫ぶ。
やまびこが響く（イメージの話なの地声で行く）。

少年　これをあいつらに直接言えたらなあ

こんな人っ子一人いないような山の上の方まで逃げることはないだろうに・・・
・・友達の一人でもいたら、こんな場所でもちっとはましなのかな・・・、

少年、しばらくしてもう一度座り込む。
しばらくボーとしていたが、イライラでいてもたってもいられなくなり、もう一度叫ぶ

少年　ばーか！！
あーほ！！
どーじ！！
まぬけ！！

少年、そのまま帰ろうとするが立ち止まり、もう一度叫ぶ

少年　ともだちほしい！！！！

少年、今度こそ帰ろうとする。
――――遠くから声が聞こえる。
「おーい！」（この声はお客さんには聞こえていない。）
少年、声に気付き振り返ると、しばらく向こうの山を伺ってから声をかける

少年　おーい
「おーい」
少年　あのー！ 呼びました！？
「よんだよー！！」
少年　・・なんかようですかー！？
「なんか声が聞こえたからー！！」
少年　・・聞こえてたんだ。そりゃ聞こえるか。あんなに大きな声で言ってたら。
「おーい！」
少年　ああ、はいはい！！
「友達、欲しいって言ったー！？」
少年　・・うん！ 言ったよーー！
「なってあげようかー！！？ 友達！」
少年　・・は？

少年悔しくて震える。

少年　　・・・バカにすんな！！

少年、走り出す。

少年　　ちくしょう！！ あんな場所で叫ばなければよかった！ 向かいの山に誰かいるなんて！ それにしてもなんなんだよ「なってあげようか？ 友達。」って！！ バカにしやがって！！ こちとらもう小４だぞこのやろう！！ 小学校の半分より上だぞ！！ ていうかあいつ何歳だよ！！ 僕より年下だったら許さないからな！
あーもう！！

少年跳びあがってそのまま胡坐をかく。
スポット
場転。
少年の家。
アパート。
ボロボロのアパート。
四畳半ぐらいの家の食卓。
その上には、質素な夕食が乗せられており、目の前にはお母さんがいる。

少年　　いやいや全然！！ 全然嫌なことなんてないよ！
「でも、母子家庭だと何か言われたりしない？」
少年　　大丈夫大丈夫！ みんな仲良しなんだから！
「そうなの？ あなた全然お友達とか連れてこないじゃない・・ 授業参観にも行けなくて学校でのようすなんて分からないし・・・」
少年　　それはあれだよ、ほら、うちってあんまり広くないからさ、皆がきゅうくつな思いしちゃうし。あと、授業参観来れないのはしょうがないよ。仕事があるんだから
「ありがと。でも一人くらいは・・・」
少年　　ほら、たくさんの友達の中から一人を選ぶとさ、なんだろ、角が立つしさ。
「あら、あなたそんなに人気者なの？」
少年　　・・・そうだよ。みんなで僕の取り合いなんだ！！
「あーよかった。ほら、あなた全然友達の話しないから、学校で一人ぼっちなんじゃないかって」
少年　　そんなことないって。気にし過ぎだよ
「お母さん安心したわ。」
少年　　もう、僕を信じてよ。

「それでも、誰か一人くらいは合わせてよ?」
少年　うん、一人くらいはね・・・
　　ごちそうさま。

少年、胡坐のまま俯く。
段々と体育座りになっていき、キョロキョロしだす。
フェードで明転。
場転。
ここは少年が通っている学校。
体育の授業中。
少年のことをいじめっ子たちが見ている

「おい」
少年　・・・
「おい」
少年　・・・
「おい！」
少年　なんだよ！
「お前ひとりなんだ」
少年　そうだよ・・・
「一緒にやってくれる友達いないんだ。寂しいやつ。」
少年　べつにいいだろ！
「お前の親とおんなじだ！　独りぼっちだ！」
少年　か、母さんは関係ないだろ！！
「せんせーい！！　一人だけペアを組めてない人がいまーす！」
少年　あ、おい！
「おい、どうしたんだ。
少年　いや、あの。相手が見つからなくて
「はあ・・・、女子の余ってる人と組んでもらえ。」
少年　はい。
「ははははは」
少年　・・・あの！
　　実はちょっと体調悪くて、今日は見学しててもいいですか・・・？
「わかった。あっち休んで来い」
少年　・・・はい。
フェード暗転

明転。
場転
ここは学校の裏山。
夕方の学校の裏山。
秋の夕方の学校の裏山。
ここは裏山にある少年の秘密の場所。
奥から少年がゆっくり歩いてくる。

少年、呆けたように下を見ながらセンターまで来て、すとん、と座り込む。
少年、頭を掻きむしり膝を抱えて座り込む。
少年、今日のことを思いだし気持ちが高ぶって立ち上がり叫ぼうとするが、昨日のことを思いだし途中でやめる。
少年　、泣きそうな顔をしながら向こうの山に背を向けて帰ろうとする。
――――声が聞こえる。
「おーい」
少年反射的に叫ぶ

少年　　おーい！！
「昨日はごめーん」
少年　　僕もごめーん！
　　：：僕の友達になってくださーい！！
「いいよー！」
少年　　：：聞いて欲しいことがあるんだー！！
　　あのね――――

ＭＥオン
少年話し込んでいるような様子で胡坐をかく。
段々とくつろいだ様子になる。
スポット
場転
ここは少年の家。
少年、ボーっとした様子。

「どうしたの？ ボーっとして。ご飯覚めちゃうわよ？」
少年　　ああ、ごめん。食べるよ食べる。ちょっと考え事してて。
「あなた最近どうしたの、ここ最近ずっとそんな調子よ？」

少年　ここ2か月くらい大声出すことがおおくて、疲れちゃってんだよ。
「大声？ 何で？」
少年　あ、いや！ なんか最近学校で大声出すのが流行ってて。
「そんなのが流行ってるの？」
少年　そ、そうだよ！ 声が大きい人が人気でさ！ 布施明とか松崎しげるがとか！
「へえ、またなんか懐かしいわね。」
少年　ははは・・・
「流行りってのは分かんないわね」
少年　そ、そうだ。この間言ってたのどうにかできるかも。
「この間言ってたの？」
少年　ほら、あれだよ。一人ぐらい友達を紹介して欲しいってやつ。
「あら！ よかったじゃない！ でも一人だけ呼んで大丈夫なの？ 喧嘩になるって言ってなかった」
少年　あ、それはね。ええっと・・・。あれだよ。あれ。その人が飛び抜けて仲がいいいから。みんな譲ってくれたんだよ！
「あら、そうなの。ねえ、その友達ってどんな子なの？
少年　どんな子って・・・、ああ、あれだよとっても優しくて、とっても気の合う子で・・・
「へえ、他には？」
少年　他には・・・、えーっと・・知らな・・いやいや！ あってからのお楽しみだよ。今度連れてきたときに紹介するから！
「ん～。でも気になるわ・・・
少年　いいからいいから！ ね？
「そんなに言うならそうね。あった時にいろいろ聞くことにするわ」
少年　うん。楽しみにしててよ！

少年、立ち上がる。
場転。
学校。
少年、いじめっ子の一人に話しかける。

少年　ねえ
「・・・なんだよ？」
少年　いるよ
「は？」
少年　僕、友達いるよ！！
「・・・は？」

少年　君たちは友達なんかできないって言ってたけど、僕にも友達がいるよ！！
　　ははははっ。見たか！！
　　ざまーみろー！！

　場転。
　裏山。

少年　――って言ってやったんだよー！！
　　ふふっ、ははははは！
　　君と会ってから毎日が楽しいよー！！　いろんな相談にも乗ってもらっちゃって
　　て！　もう感謝してもしきれないよ！！
「(何かボケる)」
少年　いや、瀬戸内寂聴か！（ご自由に変えてください）
「(何かボケる)」
少年　与田剛の肩幅ぐらいあるじゃん！！（ご自由に変えてください）
「(何かボケる)」
少年　っぷ。ははははっ！
「ははははは！」
少年　……
「…」
少年　あのさー！
「なにー！？」
少年　一緒に遊ぼうよー！！
「遊んでるじゃん！！」
少年　そう言うことじゃなくて！！
「どういうことー？」
少年　あの、その…
　　会えないー！？
「えー？」
少年　あって遊ぼうよ！！
「…」
少年　…あれ？
　　おーい！！
「…」
少年　…おーい！！
「…」

少年、何度も呼びかける。
返事は来ない。
フェードで暗転

場転
少年胡坐をかいている
少年　・・・
「――――ねえ、ねえったら」
少年　・・・ん？ あ、ああ・・・。どうしたの？
「友達よ、友達。」
少年　あ、ああ・・・友達ね。
「いつになったら連れてきてくれる？」
少年　うん、そのうちね・・・。
「いつ来るか分からないと。」
少年　わかってるって。来るときになったら言うから
「お母さん、色々と準備しないといけないし」
少年　うん、うん。
「だから・・・ねえ、本当にその友達って――――」
少年　解ってるって！！
友達でしょ！？
いるよ！ いるんだってば！！ 今度連れてくるって！！　大丈夫なんだって！
山の向こうに、山の向こうに、いるんだって！

少年、叫ぶ。

少年　おーい！！

場転
少年、叫ぶときにメガホン代わりにしていた手をグーにして顔の前に持っていき、
胸ぐらを掴んでいるような体制になる。
ここは学校。

少年　もう一回言ってみろよ！！
「ああ、言ってやるよ！ お前友達なんて嘘だろ！！」
少年　本当だよ！！　本当にいるんだよ！！

「嘘つけ！ 見たぞ！ お前が山に向かって叫んでるの！」
少年　み、見てたの・・・？ 見てたんなら分かるだろ！！
　いるんだよ！ 山の向こうに！ 友達が！ 返事してくれるんだ！
「俺が見たときは声なんか聞こえなかったぞ！」
少年　聞こえなかった・・・？ そんなはずないだろ！！ 僕は実際に話してたんだ！！
　たくさん！ 話したんだよ！！ いろんなことを！いろいろ相談んにも乗ってもらって！ だから僕は――――
「なんだよ。そんな必死になって。そいつのこと好きなのかよ。居もしないのに」
少年　――――ああ、そうだよ・・・！ 多分、僕は、好きだったんだ。
少年　山の向こうのあの子のことが。

少年、走り出だし、次第にゆっくりになっていく。

少年　あの場所で叫んでよかった。僕の見えない場所で、君みたいな人がいるなんて。「なってあげようか？ 友達」って、僕の年も顔もなんにも気にせず言ってくれた。
　ねえ、ねえ君がほんとはいないとして、僕は、ぼくは・・・

少年、転びそうになって踏ん張る。
場転
ここは裏山
少年、正面を見据えて手を口までもっていきメガホンのかたちにする。

少年　おーい！ 聞こえたら返事をして！
　返事はない
　少年、俯いてから少し考え込みもう一度叫ぶ
少年　もし君が本当はいなかったとしても・・・・――もういいんだ！！
　これからも毎日ここに来るよ！ 毎日ここに着て君に話しかける！
　返事なんか、なくてもいいよ！！ 僕は、ここで！！ ずっと！！
　会わなくても、会わなくてもいいから！！
　・・・また明日！！

少年、踵を返して帰ろうとする。
少年が向いた先にスポット。
少年、スポットが射すところを見つめ、走り出す。
【おわり】